

何を伝えるか

日本テレビが、11月30日の夜生放送した歌番組「音楽の祭典、ベストアーティスト2011」で、一部出演者の歌唱シーンは、2週間前に収録した映像を生放送のように演出したものだことが明らかとなりました。

関係者によると、「平井堅」さんと「いきものがかり」の出演部分は、11月17日に東京都内の日本テレビのスタジオで収録されたもので、その際、スタッフが観覧客に「生放送の司会者から呼びかけられた設定で反応してほしい」と依頼すると共に、「口外しないように」と念押ししていたといえます。

日本テレビでは、こうした演出は現場のプロデューサーらの判断で行われたものであり、「全体としては生放送で、視聴者をだますつもりはなく、楽しんでもらうために一部を事前収録したが、注意が足りなかった」としています。

ただ、「楽しんでもらうため」という意図であったとしても、生放送でないものをあたかも生放送として放映することは明らかな「騙し」であり、それを「騙すつもりはなかった」として済ますことには問題があるでしょう。

生放送であろうとなかろうと、芸能番組ですから目くじら立てる程のことではないかも知れませんが、「蟻の一穴」という言葉があるように、生放送でないものを生放送として放送するような体質や精神は、テレビの持っている影響力を考えると看過できません。

一体この番組のプロデューサーは、録画を生放送することで、何を伝えたかったのでしょうか。生放送か録画かは、テレビ画面では差があるわけではありませんから、録画である旨の表示をすれば済むことだったはずで、ひにくれ者の私としては、件のプロデューサーは、全部生放送とすることで、自分の力を誇示するつもりだったのだろうかと考えてしまいます。

タレントの萩本欽一さんは、かつてNHKの「課外授業 ようこそ先輩」に出演した時のことを、こう語っています。

「沢山の子どもと出会いました。最後に帰る時、一人の男の子が僕のズボンをぎゅっと握って、うつむきながら「帰っちゃ、やだ・・・」ってぼそっという

わけ。その手の力強さに、ホロッとキちゃった。これがドラマなら、「帰っちゃ、やだー！」って叫ぶところでしょう。でも、子どもはそんな大人の期待とはまるで正反対のことをする。その子はうつむいちゃってるし、テレビに映しても泣ける絵になりません。この感動が届けられたらなあ、テレビってまだまだやり残したことがあるんじゃないかなあ。(11月24日付道新「ぼくはテレビっこ」から)」

日本テレビのプロデューサーが何より大事にしなければならなかったのは、本物の感動を伝えることであつたはず。もしも、それを、生放送でないものを生放送とすれば可能だと考えたのであれば、その貧困さが悲しくなります。

彼には(といつても、私にはどのような方か知りませんが)、萩本欽一さんがいっている「テレビのやり残していること」を追求して欲しいと思いますし、何より伝えるべき感動とは何なのかを学び、考えて欲しいと思います。

(塾頭 吉田 洋一)